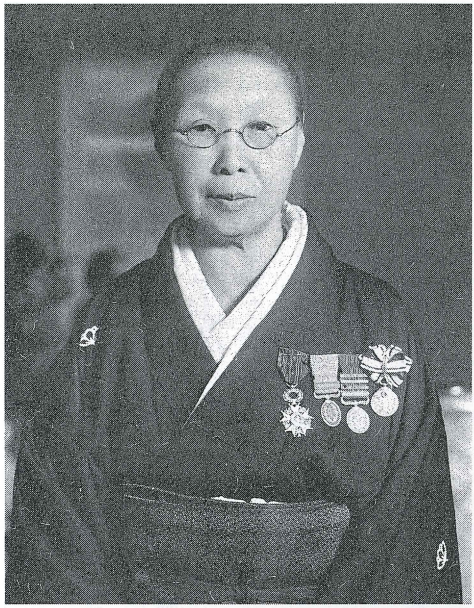


鈴木よね刀自 没七十年

資料特集

鈴木よね刀自は昭和十三年五月六日に死去されてから七十年、生誕から百五十五年にあたり、これまでよね刀自についてはいろいろと書物に著されてはいますが、鈴木商店の社員からお家さんと呼ばれ親しまれていた店主よね刀自の人物像が表現されている著作と半生以上に趣味を越えて造詣の深かった俳句・和歌をよね刀自直筆の一部を紹介します。



海辺

はる風は枝をなやませしはまの松
かすみくしてなみ静かかり

海辺
はる風の枝もならさで はまの松 かすみくして なみ静かかり

誕生

うれしくも今宵うまれて七十をこしても見える もちのよのつき

誕生

うれしくも今宵うまれて七十をこしても見える もちのよのつき

衣

たもちの古ころもにしき着るよりうれしかりけり

衣

たもちの古ころもにしき着るよりうれしかりけり

濱の家よ 舟のゆき、の長閑さよ
追手ふく 舟のゆき、の長閑さよ

濱の家に行て はるの海をながめてよめる

追手ふく 舟のゆき、の長閑さよ

こころうきたつ春の海ぞら

よね

春曙

あけ方はる風さむしよこ雲の
かすむ外山に花の雪ちる

春曙

あけ方はる風さむしよこ雲の
かすむ外山に花の雪ちる

よね

おのが子の こころやさしき ふるまひは
老たる身にぞ 誠うれしき

うれ敷もの

おのが子の こころやさしき ふるまひは

老たる身にぞ 誠うれしき

よね

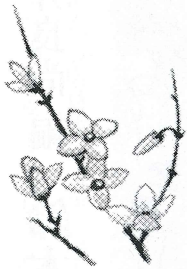
高畑ぬしの喜寿を祝ひて
高畑の老松しげるめでたさに
鶴もみどりの梢に遊ぶ

高畑ぬしの喜寿を祝ひて

高畑の老松しげるめでたさに

鶴もみどりの梢に遊ぶ

よね



鈴木よね子としの七十七なりたまふをいはひて
七十あまりな、は物かはすこやけく八十路百とせ君はいは、む 良秀

鈴木よね子としの亡くなりたまふに手向まつる
ちやの道工の業にいすを多く世にのこしおきていきし君はや 良秀

昭和二年秋鈴
木よね子とし(刀自)におくる 一三
倒れてもまた
おきあかる小法師の
しづくに
ならへこころ
しつかに

先人とおのれとの胸像の成るをよろこびて
おほけなやおのがふたりのかほかたちされどもうれし千世にのこらん よね子

高畑夫婦の名をかりて
高畑ののどけきそらに千代にはふたずの聲こそ目出たかりけれ よね



性行

事業に対して人も人に対しても凡て満腔の親切を以って之に處し曩に夫岩治郎を内助して成功せしめたるも夫死後益々事業を拡張し一方得意先其他出入者を厚遇し且つ其使用人に対しても常に懇切なる温情を傾注し万事頗る公平にして何事にも凡て綿密なる注意を払い其細心なる裏面に於て又甚だ大胆なる氣風を有し諸般の事業に巨額の資金を投じて平然たるのみならず仮令多少の損失を招くが如きことありとも毫も介意する所なく却つて店員を慰撫奨励して益々奮闘せしめ而も店員を信用すること頗る厚く諸般の経営を挙げて悉く之を一任し決して干渉するが如きことなく唯其報告を傾聴し隔々其指揮を仰ぐことあらば之に対して裁断を下すのみなりき

居常は頗る厳格にして其氣風は家庭の一切の事物に反映し儀容甚だ整然たるものありき蓋し事業の成功は店員の功勞多きに因るものとし内外に対し毫も誇る所なく又世間一般に対する態度も常住不変飽くまで謙讓にして毫も輕佻浮薄の氣風を存せず隨て婦人の成功者に於て往々見る所の虚栄心の如きは夢想だになく其举止動作凡て恭儉を旨とせり

例えば諸方より到来の小包包装等は自ら是を解き包紙と紐類を別々に整理し紐類は巻取りて他日の用に供し包紙は懇に皺を延べ他の不用紙類と共に朝夕手習い用紙に利用し濫に白紙を用ふること無かりきまた平常寸暇ある毎に白木綿を黒糸にて刺し布巾と為し店員若くは自宅に出入りする人々に贈與せり其数数千枚に及べり
又常に人材の養成に留意し店員或は書生に學資を給して学校に入学せしめ尚海外留学を為さしめたること等枚挙に遑あらず

信仰好尚

神仏の信仰厚く近府県の神社仏閣靈場は殆ど参拝せざる所なく殊に毎月一日十五日は神戸市内官幣社に毎月二十八日は宝塚米谷清荒神に参拝するを例とし亡父の命日には必ず墓参寺詣を欠きしことなし
俳句 明治二十八年頃より坐右庵唇風先生に師事したり
和歌 明治三十四年頃より藤村叡雲先生に後木村忠彦先生に大正十二年頃より逝去直前までは西宮の吉井良秀先生に師事したり
謡曲 明治三十四五年頃より中村彌三郎先生に師事したり
小鼓 明治三十五年頃より荒木 賀光先生に師事したり
生花 (盛花) 大正六年頃より小原光雲先生に師事したり
茶の湯 明治四十年頃より炬口宗琴先生に師事したり
骨董品を好み特に蒔絵類を愛したり

恩賞

緑綬褒章を賜う 大正四年四月
紺綬褒章を賜う 大正九年四月
レジオンド・ノール章を授与さる 昭和元年十一月仏国政府より
紺綬褒章飾板三個下賜せらる 昭和二年六月

社会事業其他に寄附のこと

金貳萬圓也 大正六年 神戸女子商業学校へ寄附
金五拾萬圓也 大正七年八月 窮民救済資金として内務省へ寄附
金貳拾萬圓也 大正七年八月 兵庫其他へ寄附
金七萬五千圓也 大正七年十月 理化学研究所資金へ寄附

金壹萬五千圓也 大正七年十二月 無線電信学校へ寄附
金參萬圓也 大正七年十二月 兵庫警察官慰安基金へ寄附
金拾萬圓也 大正八年 東京乃木神社建設費へ寄附
金壹百萬圓也 大正十二年九月 関東大震災罹災者へ寄附

跋はつ

鈴木よね子刀自が亡父の門に和歌の道を聴きに見えたのは大正十二年の頃と思う。刀自は巾幗の身を以つて鋭意実業界に雄飛せられつ、ありしは世間周知のことであるが一方早くから文雅の道にも志篤く和歌俳句茶道などにも造詣があり、非凡な人格の反映を窺うことが出来日頃大方の模範として其の高風を慕われている方であった。

昭和三年六月には其の所作約三百首を纏め「鈴の音」と題して梓に上され、昭和七年には父の社中なる清水社同人の歌集「しみつ」にも数十首を寄せられている。爾後愈々精進を続けられていたが、昭和十四年は恰かも米寿に達せられるので其の記念にもとて更に歌集出版の志を持たれ、其が印行のことに就いて亡父も相談を受けて居たようであった。然るに刀自はゆくりなくも昨年五月敢なく急逝されたことは誠に惜みても余あることであつた。其年の末に刀自の御遺族から折角遺稿として版行したいとの御話をはじめ、当時まだ健在であつた父も是を諒として歌稿の校閲を初め概ね完了した、或はまだ見直しをする心算であつたかとも思われるが、是に先だち其分類整理について一二の人の手助けを求めていたのであつた。本年になって一月中旬かりそめの病床に臥した父は薬石効なく鈴木刀自の後を追つて遂に二十五日白

玉樓中の人となつた。茲に於てか不肖な私が亡父の遺志を体して刀自

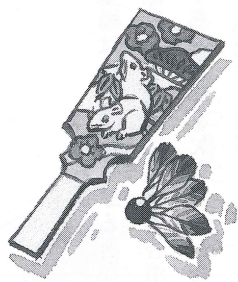
の歌集鉛槧えんけんの業に當たらねばならぬ因縁が生じたのである。素より其道に疎い私としては誠に鳥澁の沙汰であるが幸にも清水社同人 佐野眞子、横田信子両女史の心からなる御手伝を得た、めに漸く剗刷くわつの運になつた次第である。

今校正略成るに方りて、鈴木刀自が屢拙宅にお見えになつた頃の風貌を思い浮べ、將たこれに接して諄々お話の相手をしていた亡父の佛などを想起すると万感の胸に徂徠するを禁じ得ないものがある。刀自も亡父も今一年で米寿を迎えんとする八十七歳で世を去られたことも思えば不思議な因縁と言わねばならぬ。

播磨灘須磨塩屋あたりの松籟まつざわに趣を添えたであろう波の音に因んでそのま、「波の音」を題名とした。編輯万端甚だ拙劣なるは故刀自並に遺族有縁の方々に対して深くお詫びする次第である。亡父世にあらば今少し手際の好いものが出来たことであろうと思えば益々忸怩じくじたる感なきを得ない。一言蛇足を附して跋とする。

昭和十四年四月

吉井 良尚



島 京子 著

幻の商社に実在したもの

鈴木商店女主人・鈴木よね

「黎明の女たち」より抜粋

端正な婦徳
明治七年（一八七四）、神戸内海岸通五丁目（いまの関西汽船乗り場近く）の一砂糖小売商から出発し、大正期に全盛をきわめ、ついには傍系会社（神戸製鋼所・帝人・日商岩井・豊年製油・播磨造船所・日本セメントほか）六十五・国内外の支店出張所百五十・社員総数二万五千を擁するまでに巨大化し、昭和二年金融恐慌のため倒産した総合商社鈴木商店の軌跡は、現在、歴史としてみる限りでも、実に衝撃的なドラマである。

同時代を生きた人々にも、むしろ鈴木商店の消長のすべては見通せず、歴史として研究するものにも、なお多数の部分が時とともに急速に消滅し、人間の営みの果敢なさを思わせるかにみえる。

鈴木商店主、よねの名は、ヨネ・スズキとして、二十世紀初頭世界の財界に君臨し、女王の称をほしひまにしていた。事実、商取引きの最盛時、大正八年（一九一九）から九年にかけ、輸出入の取り扱いは貨物船は七十五隻（九千トンクラス）に及び、当時スエズ運河を通過する約一割の船舶は、鈴木よねの米マークだったと記録されている。年商も十五億四千万円に達し、このとき鈴木は三井を抜いて、わが国貿易

商社のトップに立ったのである。

昭和五十九年十月二十六日、秋空が高く澄む午前十一時、阪急御影駅山側にそびえ建つマンション、「メゾン白鶴」に高畑千代子氏を訪ねる。明治三十四年（一九〇二）生まれの千代子氏は鈴木よねの愛孫。鈴木王国のさかんなころ、孫姫様として成長し、現在まで幸せな人生を過してきた、と聞いている。

八十三歳の千代子氏は、兵庫県立第一高女出身、中背でまだまだ美しく、聡明でもあつた。「祖母にはかわいがつてもらいました。祖母はもともと平凡な女性で、主人が亡くなつたなりゆきで、あんなつただけで、いまふうの女実業家、女社長的是は絶対ありません。まあすべて番頭の金子直吉さんと柳田富士松さんを信頼し、会社のことは知りませんでした。西川文蔵さんのことは尊敬していました」

いわゆる攻めの金子と、守りの柳田といわれた絶妙のコンビ番頭に加え、明治二十七年（一八九四）学卒近代派の西川が入店、鮮やかな帳簿計数処理、経済知識、経営力に驚嘆すべき才腕をみせるに至り、鈴木よねの基礎は固まったというべきか。

「その西川さんも、手をひろげる一方の、金子さんのやり方を、とめることができず、鈴木はつぶれたけど、いまだつらつぶれなかつたと思います」

会社のことは、すべて金子たちにまかせていたよねだが、千代子氏の知る限り

「毎日出勤していました」

よねはきわめて行儀よく、正座し首を伸ばしたまま何時間でも過すことができた。いまに残る写真を見ても、端正なやや男性的な顔と、